

たんぽぽ



西東京市立柳沢中学校

第1学年便り

令和6年10月25日

No. 18

10月30日は「川越校外学習」

来週は、いよいよ川越校外学習ですね。今まさにコース決めの真最中です。副班長を中心に、見学場所を決めています。（この便りが、発行されるときにはもうコースは決定されているでしょう。）一日、班で行動するのでお互いに思いやって行動しましょう。

「江戸の面影を残す情緒あふれる城下町」

さて、川越といえば、江戸と結びつきが深かったのです。特に徳川家との縁。喜多院内にある仙波東照宮では、1616年に没した家康公の亡骸を日光に移すとき、住職天海大僧正によって大法要が営まれました。それを、縁に、東照宮が建立されました。この社も1638年の大火で焼失しましたが、よく翌々年には場所を移して再建されました。この時の願主は三代将軍家光公でした。

東京では見られなくなった「江戸」の風景が残る今も川越は大事に守っています。このような場所を見学し、小江戸について学習し、川越という町の深い魅力を知ることができればと思います。

「合唱コンクール」を終えて

ホールいっぱいに広がったクラスの心と心のハーモニー

今号では、B組の作文を紹介します。

「人と繋がること」

I T

私は、音で人と人は繋がれる、繋がっていることを深く知ることができました。

クラス合唱では、トップバッターで緊張し、正直私自身、今までで一番良い合唱、伴奏はできませんでした。しかし、一生懸命頑張ってきたB組なので、ずっと近くで見てくれてきた担任の先生や、音楽の先生には、しっかりと私たちの歌が届いたと思います。完璧な合唱じゃなくたって、思いをのせて歌えば、思いは相手に伝わると思いました。

また、合唱はよく響くものだと思います。私は小学生のときピアノの発表会をホールで行っていましたが、同じホールでも一人で弾くことより学年で、全校で歌うほうが会場に響きました。それは合唱ならではのよさであり、だからこそみんなで音をつなげなければ響かない難しいところでもあると思います。特に三年生は、音が一つになり、人が多いにも関わらず、歌詞が一つ一つしっかり聞こえました。なかには心に響いた人もいます。私も先輩達のような合唱をしていきたいと感じました。

このように、音は私たちの心を繋げてくれるもので、音のある生活をしているなかでも合唱コンクールを通じて、いつもより深い何かを感じあえたと思います。そんな合唱コンクールは、素敵な時間になったでしょう。みなさんも、人とのつながりを大切にしていってください。

「またも優勝…」

N N

「一年生、金賞は…」

僕たち B 組は、運動会で総合優勝を果たし、教室の壁一面に表彰状が貼られていた。また日頃からの「ハンカチティッシュキャンペーン」で学年一位をとったりしていた。ここまでは一位をどのクラスにもゆずっていなかった。だから、これから一位をゆずらないという断固たる決意をしていた。そして次の表彰は、「合唱コンクール」だった。

「次も取れるだろう。」僕はそう思っていた。

合唱コンクールの練習期間は二週間であった。その期間に歌の完成度をどれだけ上げられるかだった。僕たちが歌う曲は課題曲の「夢の世界を」と、自由曲の「マイバラード」であった。どちらの曲も難しい曲ではない。

クラスで合唱を始めたとき、三部の声に分かれ、僕はテノールという一番低い音程を歌うことになった。ソプラノやアルトは始めた時から音程がきれいだった。しかしテノールはそうとも言えずひどかった。音を外してしまったり、声量が違ったりと。

「まあ、練習をすれば大丈夫。」

そう思い、二週間練習した。予想通り僕たちテノールは完成度を高められた。

ついに本番。緊張感を持ち、僕たちは挑んでいった。

けれどまさかの金賞は逃してしまった。僕たちはとても悔しかった。でも僕は学んだ。

「今までの練習してきたことが金賞。」

たとえ金を逃してしまったとしても、金にあたる練習をしてきたと。また、先生に「上手くなった。」と言われたことが金賞であると。

でも次回は金賞を必ずとりたい。だから、次回は合唱コンクールに対する意識をさらに高めていきたいと思った。

